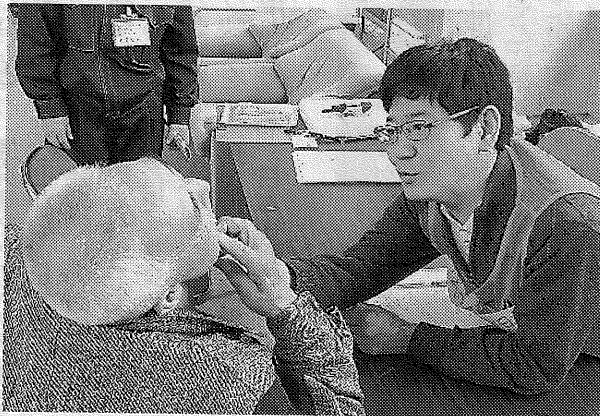


口の清潔 被災地でこそ

北九州の歯科医、避難所回り訴え

北九州市の歯科医師、杉山正隆さん(49)が、東日本大震災の被災者の治療のため、歯科医療に携わる有志とともに6日から3日間、被災地入りした。現地訪問2回目の杉山さんは、「口の中の衛生はまだ保てていない。肺炎などの予防のため、口腔ケアに力を入れたい」と話した。



4月に現地入りした際、岩手県宮古市田老の避難所で被災者を治療する杉山さん(右)と杉山さん提供

杉山さんは元毎日新聞記者。親の歯科医院を継ぐまで数年間、医療取材などを担当した。今回の震災では4月上旬、有志の歯科医師や歯科衛生士らとともに、器具一式を持って岩手や宮城の避難所を回った。今月6日から8日までは、地元の歯科医師も加わって宮城県石巻市の避難所7カ所などを訪ねた。

4月に訪ねた避難所では多くのお年寄りが入れ歯を失い、食べ物をかめずにいる。岩手県宮古市田老で出会った女性は歯が折れ、食事をできずにやせていた。

歯科技工士が入れ歯を修理したところ、「ダイヤモンドをもらうよりうれしい」と涙ぐんだという。

入れ歯洗浄剤が足りず、入れ歯を着けっぱなしのお年寄りもいた。杉山さんは「口腔内が不衛生になると肺炎を引き起こす」と危ぶむ。日本口腔ケア学会の鈴木俊夫理事長は「被災地の歯科医療は機能しつつあるが、口内を清潔に保つ口腔ケアはまだできていない。歯科医師と歯科衛生士がケアで当たるのが大切」と指摘する。

杉山さんは「被災後から歯肉がしみるようになった」と訴える人が増えるなど、口腔ケアの必要性は依然高いと感じた」と話した。

(岩本美帆)